

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32665
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2021～2023
 課題番号：21K00424
 研究課題名(和文) 中世後期ドイツ宮廷文学の遊戯性の諸相 恋愛文学のパロディー化における作者性
 研究課題名(英文) Various aspects of "play" in the medieval German literature - the author's intention in the parodistic love romances
 研究代表者
 渡邊 徳明 (WATANABE, Noriaki)
 日本大学・松戸歯学部・准教授
 研究者番号：20547682
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：[1年目]1200年頃の宮廷恋愛が、中世後期の文学に規範となるもパロディー化の対象とされ、社会各層の文化に影響したことを論じた。パロディー作品では年齢的成長が人物の人格を高めない点にも着目した。[2年目]1200年前後の古典的作品に描かれる「宮廷的遊戯」としての恋愛奉仕に関して、財産や身分を守るシステムとしての恋愛、肉感的な恋愛遊戯、パロディー化と再解釈、粗野な農民の描写などを議論した。[3年目]それらの文学作品における婦人の「名誉」に注目し、騎士達による恋愛奉仕や彼らとの結婚という、コード化された恋愛遊戯の外的な側面に左右されぬ、婦人の名誉の内的な深さを詩人たちがどう描いたかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半から盛んだった中世ドイツ語叙事詩に外在する伝承素材メインの研究に対し、それを踏まえて、これらの素材を生かして作者がどのような創意を發揮し、読者・聴衆による受容の際のどのような効果を狙ったのか、という点について考察した。とりわけ恋愛文学における遊戯性を考察の中心に置いたのであるが、この「遊戯」を文化学的な文脈で広義にとらえ、1)パロディー化における言葉遊びについての「遊戯的」感覚を創作にどのように実行したかという作者性、また、2)宮廷文学における「恋愛」の作法やコードを踏まえた「遊戯」的な男女のやりとり、についても考察を行った。近年の心性史研究を解釈に取り込んだ点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：[2021] We discussed how court romances around 1200 provided the narrative materials to the later medieval texts. As to these later parody texts, we emphasized that the figures do not become riper and have profounder thought nor more dignity, which is clearly different from the classical epic work like Parzival. [2022] Regarding the service of the knights to the court ladies as a "game" in the aristocratic society, as is depicted in these classical texts around 1200, we discussed this court custom firstly as the basic codes and worth connecting these court members with each other in the closed high society, secondly as sensual love, thirdly as the new arrange of the original older manner, with which later even crude peasants imitate the knights comically. [2023] Focusing on the "honor" of ladies in these literary works, we examined how the poets described the inner depth of women's love to her knight which does not depend on the external or social aspects of the coded love games.

研究分野：中高ドイツ語文学

キーワード：宮廷騎士文学 パロディー 中世ドイツ文学 ヨーロッパの恋愛伝統

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)

作者性 1970年代、80年代のドイツの中世文学研究では、諸作品の描写を相互に比較し中世において一般に共有されていた予備知識・コード化された行動様式に基づく価値基準などを再現して、それに照らして人物描写を説明する傾向が強まった。一見すると辻褄が合わず、非合理的に見える行動描写も、中世の読者が共有した知識や感性を踏まえ説明する。それだけ作品解釈はテキスト外の伝承要素に依存することになる。しかし90年代に入ると、外在的要素を想定した作者の創意が強調され始めた。明確な創作意識の外にある、無意識的な精神構造・認識構造・感性・記憶といったものを創意としてどのように位置づけるかが問題となった。この作者性の問題は2020年10月に刊行された代表者渡邊の論文でテーマとした。

(2)

上記の渡邊論文は2019年のシンポジウムでの成果であるが、このシンポジウムでは、ホイジンガの「遊戯」の概念をメンバー全員(本研究のメンバーのうち4人はそこに含まれる)の共通のベースとした。数ある遊戯論の中でもホイジンガの遊戯論は中世文化論から出発したものであり、中世文学研究に援用するのは自然な流れである。特に「逸脱的でありながらルールに従う遊戯の二律背反」という性格を我々メンバーはホイジンガの遊戯論の中核的な考えとしたが、それは伝承への依拠と創作を両立する中世詩人のメンタリティーと相性が良い。ホイジンガは、『中世の秋』(1919)で、中世の人々の生活における聖俗混交が身体化された、遊戯的かつ類型的な諸行動を描いた。遊戯論『ホモ・ルーデンス』(1938)の原型的思想が含まれる。同時代のオットー、ハイデガー、フロイト等と同じく、日常の物的世界で、意識で明確には把握できない生、日常の中に自分自身と世界の非日常的関係性および人間を支配する無意識的で不明瞭な力を見出すという点でホイジンガも共通する。

2. 研究の目的

(1) 中世ドイツ語圏の宮廷騎士文学の古典的諸作品については、20世紀後半には受容者が共有する認識や物語素材が重視されたが、1990年代以降には、そのような外在的伝承素材を戦略的に作品に取り込んだ作者の積極的営為や精神構造が注目されている。本研究では、13世紀以降のパロディー的な文学作品に積極的作者性を見出すことをめざした。

(2) 1200年前後の古典的な作品とそれら時代の下ったパロディー的の描写の比較によって、社交的な遊戯としての恋愛の描写の変化を明らかにし、さらには戯画的で即物的なタッチの性愛描写が古典期の恋愛観念をいかに変質させたか、更に伝語圏の文学の影響はいかなるものか、など比較文学的視点からも考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 中世ドイツ文学テキストについて以下のアプローチがとられた。

1) ドイツ中世後期のパロディー的の作品の性愛表現の執筆態度に関する、および、登場人物の行動に関する遊戯的な性格に着目し、作者性の多寡・様態を解明する。2) 古典的作品『パルチヴァール』の性愛的描写と主人公の成長の関係を明らかにする。3) 英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』とゴットフリートの『トリスタン』が伝承をどのように利用し、貴婦人の宮廷的恋愛の問題を描写したかを、特に遊戯性の問題に着目して考察する。4) 恋愛の抒情詩ミンネザングでは1220年代ごろ、古典期の理念性を揶揄する辛辣な作品が生

まれるが、その変化を2)と3)の叙事詩の叙述傾向の変化と比較して特徴づける。

(2) 中世フランス文学テキストとの対比で上記の諸作品について考えた

5)古典期の文学のみならず、次世代のパロディー的な文学の作者の遊戯的執筆態度に対するフランス文学の影響を考察する。6) 15世紀の叙事詩『指輪』に見られる古典期の作品にはない卑猥な性愛表現に関し、後年のフランスの物語作家ラブレーとの関連で調べる。

4. 研究成果

(1)2021年度のチーム全体の成果

2021年12月10日の国際アーサー王学会日本支部においてメンバー全員でシンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」を開催し、各自が研究計画に沿って口頭発表した。ドイツ中世宮廷文学の最盛期は1200年頃とされ、その時期の「偉大な」詩人たちによる叙事詩や叙情詩は、中世後期にいたるまで規範とされ、更にはパロディの対象とされ、貴族のみならず社会各層の文化の土台となった。ドイツの宮廷文学は当初、人のあるべき姿を表現しモラルを提示しようとした。それまでキリスト教の聖人を人々が模範としていたとすれば、宮廷の騎士や貴婦人が人々の行動規範を体現する存在になったことは革命的变化と言える。ただし、中世キリスト教文化において、肉体と男女間の愛はあくまで罪深く、常に留保つきで許容されたのも事実である。つまりそれらはあくまで祈りと理知的節度で制御されるべきものであった。ここで一つの問いを我々は提示した。すなわち「人は老いることで賢くなり、無知や肉と情欲の害から離れることができるのだろうか」という問いである。松原は主人公の罪の償いと成長との関係を扱う『パルチヴァール』について論じた。伊藤は愛(ミネ)の概念論争が最も端的に表現された恋愛詩における老いのモチーフについて論じた。渡邊は成長(老化)と罪深き愛の克服が単純に結びつかない例を『トリスタン』に見いだそうとした。更にこのテーマに関し、ドイツ語圏に特有の傾向が看取できるのか、という点について、ドイツ語圏中世宮廷文学の成立に大きな影響を与えたフランスの文学の動向を踏まえるべきで、その観点から高名が『狐物語』について論じた。また、このテーマの通時的・歴史的な変遷をたどる目的で、嶋崎はキーワードとなるドイツ語“tump”の意味論的・語用論的变化を語学面から解明した。

(2) 2022年度のチーム全体の成果

1)2022年12月10日に龍谷大学で開催された国際アーサー王学会日本支部大会において、シンポジウム「宮廷騎士文学の遊戯性の諸相 恋愛奉仕のパロディー化を中心に」を行った。本シンポジウムでは、13世紀以降のパロディー的な文学作品を扱った。1200年前後の古典的な作品とそれから時代の下ったパロディー的な作品の描写の比較によって、社交的な遊戯としての恋愛の描写の変化を考察した。古典的なテキストの中に描かれる人物たちは、宮廷社会のコードを共有して社会的な役割を演じるという意味で遊戯の参加者であり、その作品を受容する者たちも、同時代の社会の実相が作品化された世界に自己を投影して楽しんだと考えられる。恋愛奉仕の描写はその代表的な例であるのだが、そこには貴婦人を称賛する聖化と共に、その肉体に目を向ける俗化の両方が含まれている。それは遊戯の中でこそ調和しうるものである。遊戯はよそ者を排除しつつ仲間意識を高める文化的な行動であり、常に新たな流行を取り込んで更新されてゆく。1200年前後には貴婦人の存在を神聖視する婦人奉仕の遊戯が宮廷を支配していたが、数十年たつと、作品を受容する場の変化に応じてその内実は大きく変容していく。本メンバーによる5つの発表ではその諸例として、財産や身

分を守るシステムとしての恋愛、より肉感的な恋愛遊戯、論議を呼ぶ人物像のパロディー化と再解釈、農民や醜さの描写を通じた宮廷文化のパロディー化などについて報告した。2)研究代表者の渡邊は広島独文学会において『ニーベルンゲンの歌』についてのレクチャー講演を行い、パロディー作品『ヴォルムスの薔薇園』での王女クリエムヒルトに対する否定的な描写の元ともなった、前者におけるこの人物の残忍な復讐劇の実行について説明した。また中世における悪魔的な性愛概念がフロイトの「不気味なもの」とどのように関連しているのかについて論文を発表した。更に、それに関連して、直接的に中世作品とは絡まないが、このフロイトの「不気味なもの」にまつわる性感情の抑圧によるドッペルゲンガー表象についての考えを応用して、E.T.A.ホフマンの『砂男』と三島由紀夫の『午後の曳航』の性愛的描写について比較し論じた。隠された性愛感情が人間をしばしば奇矯な行動に走らせる、という意味では、中世における高雅な宮廷文学もそのパロディーも一貫した部分があり、そのようなヨーロッパ文化の底にある性愛についての問題意識を系譜的に追ったともいえる。3)研究分担者の高名は著書『『狐物語』とその後継模倣作におけるパロディーと風刺』(2023年2月、春風社、単著)を出版した。

(3)2023年度の成果

1)2023年10月の日本独文学会シンポジウムでは、古典的中高ドイツ語作品における婦人の「名誉」が中心テーマであった。名誉は、騎士達が能動的に苦難や冒険によって獲得するのに対し、婦人達の名誉は受動的に与えられる。名誉が婦人にとっていかなるものであったのか、騎士における名誉との違いや共通性にも注目しながら考察した。騎士や貴婦人にとって、宮廷的振る舞いのコードを共有するという一種の「遊戯」が行われるが、その宮廷的恋愛で貴婦人が名誉を得るには、単なる表面的な行動にも増して、むしろ恋愛における内面的な誠実こそが問題とされる。「名誉」の外見性と内面性が問題となり、恋愛「遊戯」も、宮廷社会のコードを共有しつつ、その解釈は多義的で、内面の深く変わらぬ思いが読み取れることが示された。このシンポジウムの成果は、本報告書を記述している2024年5月現在、論文として脱稿した状態であり、2024年度中に論集化される予定である。2)研究代表者の渡邊は、『ニーベルンゲンの歌』の作者の営為を巡る近年の研究動向を整理して論文化した。本研究プロジェクトのテーマにも挙げた『ヴォルムスの薔薇園』は同叙事詩のパロディーであり、共に作者不詳で民族伝承をベースにした英雄叙事詩である。そのプロフィールの分からない作者についても、それなりに強い創作者としての意識があったのであろう、という前提で論じてきたが、近年はこれら英雄叙事詩の刊行テキストが、大まかなヴァージョン別ではなく、一つ一つの写本の違いに着目して論じる傾向が強まり、それぞれの写本の個別事例についての創作意識を論じる傾向がある。こういった問題についての近年の議論の傾向を整理し、それらの議論に影響を与えている哲学的伝統、心理学的伝統についても言及した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 渡邊徳明	4. 巻 56号
2. 論文標題 中世以来の愛にまつわる「不気味なもの」の伝統 - 人間の「物化」に対するフロイト的な恐怖 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『リュンコイス』（桜門ドイツ文学会）	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡邊徳明(Noriaki Watanabe)	4. 巻 2021/2022 Band 2
2. 論文標題 Doppelgaengermotive im Vergleich Phantastisch-pathologische Szenen in Yukio Mishimas Gogo No Eiko und E.T.A. Hoffmanns Sandmann	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Akten des JGG-Kulturseminars 2021/2022 Band 2 2023 Hrsg. von JGG, Phantastische Literatur	6. 最初と最後の頁 113-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 渡邊徳明	4. 巻 164
2. 論文標題 [書評]馬場大介著『近代日本文学史記述のハイブリッドな一起源 カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ドイツ文学』（日本独文学会）	6. 最初と最後の頁 219-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡邊徳明	4. 巻 55
2. 論文標題 大林宣彦の映画に見られる生死の混淆と円環的時間 ヨーロッパの文化・思想との関係を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 リュンコイス	6. 最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高名康文	4. 巻 13
2. 論文標題 ファブリエーにおける貨幣	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 50-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 渡邊徳明
2. 発表標題 『ニーベルンゲンの歌』から『ヴォルムスの薔薇園』へ クリエムヒルト像の変遷について (シンポジウム: 宮廷騎士文学の遊戯性の諸相 恋愛奉仕のパロディー化を中心に)
3. 学会等名 2022 年度アーサー王学会日本支部年次大会 (龍谷大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊徳明
2. 発表標題 〔招待講演 有償〕愛の物語としての『ニーベルンゲンの歌』 クリエムヒルト、プリュンヒルト、ヘルヒェ
3. 学会等名 広島独文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊徳明
2. 発表標題 Politische Gedichte in Sieben Meere (抄録と録画 https://onsem.info/seminar2022/politische-gedichte/)
3. 学会等名 31. Seminar zur Oesterreichischen Gegenwartsliteratur in Japan, Mit Karl Lubomirski
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊徳明
2. 発表標題 中世以来の「不気味なもの」の伝統 - 「物化 = 脱精神化」の恐怖 -
3. 学会等名 桜門ドイツ文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高名康文
2. 発表標題 アトリエ「文化的背景を組み合わせた単語解説の試み：スポーツ、乗り物、宗教を例に」 片山幹生, 高名康文, 有田豊
3. 学会等名 第37回関西フランス語教育研究会 2022年3月28日 関西フランス語教育研究会 第2報告「乗り物の名前」を担当
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高名康文
2. 発表標題 シンポジウム「中世・ルネサンスのテキストとイメージ 写本から揺籃期本へ」 篠田勝英, 高木麻紀子, 高名康文, 高宮利行, 宮下志朗
3. 学会等名 日仏文化講座 於 日仏会館 2023年2月25日 (公財)日仏会館 第1報告「へたうま? 豪華? 『狐物語』I写本 (BnF, fr. 12584)」を担当
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高名康文
2. 発表標題 シンポジウム「宮廷騎士文学の遊戯性の諸相：恋愛奉仕のパロディー化を中心に」 渡邊徳明, 松原文, 伊藤亮平, 高名康文, 嶋崎啓
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部2021年度年次大会 於 龍谷大学 2022年12月10日 国際アーサー王学会日本支部 第3報告「パストレルにおける人間性と動物性」を担当
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤亮平
2. 発表標題 Tageliedのパロディーに見られる作者性 -Wolfram以降のミンネザングを中心に-
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部会年次会（龍谷大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 嶋崎啓
2. 発表標題 ヴィッテンヴィーラー『指輪』における農民と騎士（シンポジウム「宮廷騎士文学の遊戯性の諸相：恋愛奉仕のパロディー化を中心に」）
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部会年次会（龍谷大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松原文
2. 発表標題 『ヴィーガーロイス』と『パルチヴァール』の女性像の比較（シンポジウム「宮廷騎士文学の遊戯性の諸相：恋愛奉仕のパロディー化を中心に」）
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部会2022年度年次大会（龍谷大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊徳明
2. 発表標題 『トリスタン』における二代にわたる「若気の至り」？ イゾルデとの愛をめぐって
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部第35回年次大会（シンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松原文
2. 発表標題 『バルチヴァール』における主人公の罪と「愚かさ」
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部第35回年次大会（シンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤亮平
2. 発表標題 宮廷恋愛詩における「若さ」と「老い」
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部第35回年次大会（シンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高名康文
2. 発表標題 『狐物語』における老い
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部第35回年次大会（シンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋崎啓
2. 発表標題 中高ドイツ語における tump「愚かな」の語義について
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部第35回年次大会（シンポジウム「老いは愚かさを克服できるのか？ 中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高名康文
2. 発表標題 「学習者の「なぜ?」に向き合う フランス語 教師に必要な歴史文法」(片山幹生、高名康文、有田豊、ジョルジュ・ヴェスイエール)
3. 学会等名 第36回関西フランス語教育研究会 (Zoomによるオンライン開催、2022年3月29日 (第2報告「どうして、フランス語では、2人称複数の代名詞 vous が、tu の敬称として使われているの?」を担当))
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤亮平
2. 発表標題 ミネゼンガーにおける「宮廷」概念について
3. 学会等名 日本独文学会中国四国支部
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高名康文	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社 2	5. 総ページ数 410
3. 書名 『狐物語』とその後継模倣作におけるパロディーと風刺	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Politische Gedichte in Sieben Meere https://onsem.info/seminar2022/politische-gedichte/ Akten des JGG-Kulturseminars https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jggks/list/-char/en 国際アーサー王学会日本支部 (メンバー全員で行ったシンポジウムについての情報) http://arthuriana.jp/japan_info/ 『トリスタン』の愛についての一考察 (渡邊徳明、国際アーサー王学会日本支部、「アーサー王伝説解説」) http://arthuriana.jp/legend/tristan_love.php mille, ville, tranquille の読み方 (高名康文・他) https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/ghf31 フランス語の否定表現の由来 (高名康文・他) https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/ghf27</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	嶋崎 啓 (SHIMAZAKI Satoru) (60400206)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	松原 文 (MATSUBARA Aya) (70827245)	立教大学・文学部・特定課題研究員 (32686)	
研究分担者	高名 康文 (TAKANA Yasufumi) (80320266)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	
研究分担者	伊藤 亮平 (ITO Ryohei) (80781070)	松山大学・法学部・准教授 (36301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関